

<b>Title</b>	高倉徳太郎の生と死(共同研究報告 : 臨床死生学研究)
<b>Author(s)</b>	中村, 準一
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 19
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2414">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2414</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# 共同研究報告

## 【臨床死生学研究】 高倉徳太郎の生と死

2010年4月16日、聖学院大学一号館1102教室大学院セミナールームにて第一回臨床死生学研究学会が開催された。聖学院大学 総合図書館長 アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科教授鶴沼裕子先生から標記のテーマについて発表があった。

高倉徳太郎は植村正久を継承する第二代目のキリスト者として、大正から昭和初期の日本基督教会の代表的な指導者の一人である。これまでの高倉に関する研究は少なく、また殊にその自死については論議の対象ともなっていない。鶴沼氏は未だ少ない研究資料と高倉自身及び周辺の人々が残した文書や関係者の証言等をもとに、高倉がキリスト教へ接近し入信を経て、後に（彼の病との因果関係が最も深かったとされる）〈福音同志会〉への関与から自死に至るまでの経緯をできるだけ詳細に辿り、また小塩力、佐藤敏夫、赤星進の著作・論文にみる高倉の鬱病と死を巡る諸家の見解に鑑み、彼の信仰と自死の特質を探った。

高倉における信仰と鬱病関係という問題を、氏は次のように捉える——高倉は信仰の弱さ故に病に勝てなかったというよりは、「信仰のみ」に救いを求めようとしたあまりに一途でナイーブな姿勢が、逆に彼を窮地に追い込んでしまったのではないか。さらに、牧師という立場にある者として、

心の内奥を吐露し援助をこうようなゼールズルガーが求むべくもなかったことにも要因がありはしなかったか。氏はこのことを、河合隼雄の〈個の倫理〉と〈場の倫理〉というタームや相良亨の日本人の他者に対する積極的関心の希薄さと言った指摘を援用しながら、「日本社会の中での〈個〉の孤立」というより大きな文脈で捉え直し、個の最終避難所として〈絶対他者〉である神を見出すそのような課題を負う個とそれが根を下ろす日本社会というプラットフォーム、内と外との両面からの重圧に悶える高倉像を描出する、そして、自死という高倉の生涯の悲劇的結末は、彼の個人のひ弱さ、未成熟に帰するに当たらず、むしろ日本社会で透徹した「プロテスタント主義」にもとづく個の倫理に徹することの成し難さを我々に身を以て示したと捉えるべきではないかと結論した。

（文責：中村準一 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年4月16日 聖学院大学1号館1102教室）



27名の参加があった